



Title	A lexical approach to voice alternation in Japanese verbs
Author(s)	今泉, 志奈子
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3184228
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	今泉志奈子 いま いざみ しなこ
博士の専攻分野の名称	博士(言語文化学)
学位記番号	第16357号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	A LEXICAL APPROACH TO VOICE ALTERNATION IN JAPANESE VERBS (日本語の動詞におけるヴォイス交替への語彙的アプローチ)
論文審査委員	(主査) 教授 春木 仁孝
	(副査) 教授 中西 暉 助教授 由本 陽子 教授 郡司 隆男(神戸松蔭女子学院大学)

論文内容の要旨

本論文は、日本語のヴォイス交替の体系に包括的な分析を与えるような意味構造理論を提案するものである。従来の研究で言及されながらもその本質が不明瞭なままであった「被影響」の概念('affectedness')が自然言語において果たす役割とその形態的な具現化を形式化することを目標とする。主な主張点は以下の2点である。

- ・制約に基づく文法理論による日本語動詞のヴォイス交替全般への統一的な分析を提示する。
- ・語彙主義的アプローチから、過不足ない記述力と柔軟な説明力を備えた動詞の意味構造理論を提案する。

本論の分析では、日本語動詞の自他交替、複合動詞形成、非動作主語構文をはじめとする文法現象を形式的に記述し、使役・再帰・受動というヴォイス体系のなかに整然としたかたちで位置付ける。そこでは、自然言語において広く観察される非対格性の問題に対してより包括的な分析を与えることが可能になる。本論で提案する理論の特徴の一つは、素性構造による動詞の意味記述のなかに、語彙意味論において仮定、展開してきた語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure:LCS)の概念を導入する点である。LCSによる動詞の意味記述では、それ以上具体化しない第一義的要素としての意味関数を設定し、それを用いた述語分解の手法を取るため、様々な動詞を意味的な同値クラスに分類し、意味の同値類をくくり出せるという利点がある。本論文は、こういった個々の動詞の意味的類似性に注目した新たな分類手法により、ヴォイス交替や項構造のあり方をより統一的に見直すものである。

第2章では、本論が仮定する理論的枠組みを提示する。まず、主としてSag and Wasow (1999)に基づき、本論が前提とする辞書(Lexicon)の内部構造を概観する。主辞駆動句構造文法(Head-driven Phrase Structure Grammar:HPSG)等に代表される語彙主義的アプローチでは、変形、移動のような動的操作に代わって、言語の構造が満たすべき性質は、辞書に指定される豊かな語彙情報とそこにかかる一般的な制約から静的に決定される。こういった文法理論において中心的な役割を担う辞書は、階層的な内部構造を備えると仮定され、個々の語彙項目について指定された語彙情報は、素性構造によって記述される。また、人間の言語知識と運用能力を考慮すれば、膨大な語彙情報が、単なる情報の列挙であるとは考えにくい。そこで本論はタイプ階層の概念を採用する。各々の素性構造が特定のタイプ指定を受け、タイプ全体が階層構造をなすと仮定することで、語彙項目間の相互関係を明示的に、かつ経済的に記述することができる。この語彙階層の概念に基づき、本論文では、以下の理論的な提案を行う。

- ・日本語の動詞の項構造情報に基づくタイプ階層を提案する。
- ・LCS を素性構造による語彙記述に導入し、受動の意味関数 AFFECTED を設ける。
- ・生成語彙の枠組み (Pustejovsky 1995) で採用されている事象構造と、それに基づく主事象の概念を動詞の意味構造記述に導入する。

まず、動詞が外項の有無によって二分され、さらに内項の数によって下位分類されると仮定する。項構造素性 ARG-ST のなかに EXT、INT という素性を設け、リストの形で外項と内項の有無を記述する。ここで項構造素性 ARG-ST の値は「動作主」「対象」などの具体的な意味役割に言及しない。代わって、本論では述語分解的アプローチを採用し、LCS による動詞の意味記述を行う。従来の研究では、2つの事象間の因果関係を規定する意味関数として CAUSE が広く採用されているが、本論ではそれに加えて新たに受動的に影響を被る個体 (=被影響者) とそれに影響を与える事象との関係を規定する関数として AFFECTED を設ける。これは、Kuroda (1979)、Gunji (1981、1987、1994) をはじめとする種々の先行研究で言及されてきた「被影響の概念」('affectedness') を LCS 上の関数として導入したものである。従来の研究では CAUSE 関数によって、行為者の視点から能動的な事象を規定することはできたが、同じ事象を被影響者の視点からとらえる受動的な意味関係へ言及する手段が欠けていた。本論では CAUSE 関数に加え、AFFECTED 関数を導入することにより、LCS レベルでのウォイス交替を捉えることが可能になる。さらに LCS が複数の事象から構成され、かつそのどちらか一方に焦点が置かれる場合、それが主事象 (head event) として語彙的に指定されると仮定する。焦点の概念を動詞の意味記述に導入することにより、動詞の自他交替や複合動詞の合成にかかる制約の体系的形式化が可能になる。主事象の指定は、ある特定の副詞に与えられる解釈に注目することで確認することができる。

- (1) a. 健が家具を部屋から外に丸一日出した。
b. 健が家具を部屋から外に丸一日運んだ。

副詞「丸一日」が「出す」を修飾する場合には、家具が部屋の外に置かれた状態が丸一日継続したことをあらわすのに対し、「運ぶ」を修飾する場合には、健が家具を移動させるという行為のくり返しが丸一日継続したことをあらわすという違いがある。これは、「出す」の LCS が結果状態を主事象とするのに対し、「運ぶ」の LCS にはそのような指定がないと仮定することによって説明される。第 3 章、第 4 章の分析ではこの受動の意味関数と主事象の概念が重要な役割を果たす。

第 3 章は、日本語の語彙的複合動詞の複合事象構造を取り上げる。「動詞 (V1) + 動詞 (V2)」型複合語の中で、特に V2 に「出す」「出る」を取るものに注目し、その中でもアスペクト形式 (= 2a) ではなく、外部への移動の意味を明示する語彙的複合動詞 (= 2b) を分析対象とする。

- (2) a. アスペクト形式：走りだす、歌いだす、読みだす、etc.=統語的複合語
b. 外部への移動：押し出す、運び出す、逃げ出す、流れ出す、etc.=語彙的複合語

3.2 節では、統語的複合と語彙的複合の区別を明らかにする。(2a) のような事象の開始を示す「だす」が統語部門での操作によってつくられる統語的複合語であるのに対し、(2b) のような外部への移動を明示する「出す」は V1 と V2 の LCS を合成することでつくられ、全体として一語としてふるまう語彙的複合語として区別されることを主張する。

3.3 節では「出す」「出る」が単独で使われる場合に、それぞれ動作主による意図的な行為をあらわす場合 (= 3a) と、非意図的なできごとをあらわす場合 (= 3b) に区別されることを示し、以下の 2 点を主張する。

- (3) a. 意図的な行為：健が家具を部屋の外に出す／健が部屋の外に出る etc.
b. 非意図的なできごと：風邪で熱を出す／風邪で熱が出る etc.

- 意図的な「出す」「出る」(= 3 a) の LCS は CAUSE 関数を共有し、非意図的な「出す」「出る」の LCS (= 3 b) は AFFECTED 関数を共有する。
- 「出す」「出る」の LCS はすべて状態変化（特に出現、発生）を示す単純事象「出る」の LCS を含み、その単純事象を介して相互に密接な関係をもつ。

意図的な「出す」の LCS は単純事象の使役化、意図的な「出る」はさらにそれを再帰化（中間化）することによってあらわされる。一方、非意図的な「出す」は単純事象の受動化、非意図的な「出る」はさらにその外項を潜在化することによってあらわされる。このように「出す」「出る」に LCS に基づく下位分類を設けることにより、両者の間には、従来の自／他動詞の区別では明らかにされていなかったような、使役・再帰・受動のヴォイス交替が成立していることが示される。さらに、(3 b) のような、動作主以外の主語を取る他動詞と、非対格自動詞があらわす意味の近似性を捉えることも可能になる。

3.4 節では、「出す」「出る」を V2 としてとる語彙的複合動詞が、これらの下位分類に対応した語彙規則によって生成されることを論じ、以下の 2 点を主張する。

- CAUSE タイプの「出す」「出る」を V2 とする複合動詞は V2 の LCS の項の 1 つに V1 の LCS が入り込む関数適用型の語彙規則によって生成される。
- AFFECTED タイプの「出す」「出る」や単純事象の「出る」を V2 とする複合語は、V2 が V1 の LCS の情報をさらに具体化する機能をもつ单一化型の語彙規則によって生成される。

本論で仮定する枠組みからの自然な帰結の一つとして、LCS の合成によって生成される語彙的複合語の複合事象においては、合成後に主事象が分断されてしまう場合に複合語の合成が阻止されるという「連続性制約」(Focus Continuity Constraint: FCC) がはたらくことを主張する。この制約により、従来の研究では未解決であった「走り出す」や「踊り出す」などの複合語が語彙的に合成されない理由（「走って／踊って外に出る」という外部への移動の解釈をもつことができず、「走り／踊りはじめる」というアスペクトの読みしかないのは何故か）が説明される。

第 4 章は、動作主以外の要素を主語として選ぶさまざまな構文を取り上げ、受動の意味関数 AFFECTED がこれらの構文にも統一的な説明を与える有効な概念であることを示す。まず 4.2 節で Dowty (1991) による「プロトタイプ的意味役割」を概観し、4.3 節以降は、このプロトタイプ的動作主からは外れるような意味特性をもつ主語をとる構文を取り上げる。4.3 節は着点 (recipient) 主語 (= 4 a)、4.4 節では被影響者 (affectee) 主語 (= 4 b) を選ぶ動詞を考察する。

- (4) a. 着点主語：受け付け（係）が客から貴重品を預かる、健が奈緒美に英語を教わる etc.
 b. 被影響者主語：家出した学生が見つかった etc.

(4 a) の「預かる」「教わる」タイプの動詞は、「閉める／閉まる」「伝える／伝わる」などの自他交替における自動詞と同じ -ar 接辞を伴う点で形態的には自動詞でありながら、ヲ格目的語を伴う点に特徴がある。本論では、AFFECTED 関数をもつ非対格動詞の下位タイプとして内項のみを 2 つ取る *diunaccusative* タイプを設けることにより、これらの動詞のふるまいに統一的な説明を与えることを提案する。また (4 b) の「見つかる」の LCS も AFFECTED 関数をもつこと、さらに、(5)のようにニ格とヲ格を伴う場合が存在することを指摘し、特に(5)の分析として内項を 3 つ取る *triunaccusative* タイプを仮定することを主張する。

- (5) 健は先生に隠し持っていたタバコを見つかった。

triunaccusative タイプを設定することの意義のひとつに、ニ格と被害の解釈との相関を適切に予測しうる点がある。

本論では、AFFECTED 関数の第 2 項に意図的な活動をあらわす事象が埋め込まれる場合に被害の解釈が生じることを論じる。その他に「指を切る」「胃に潰瘍をつくる」などの所有者主語や、「手をこまねく」「鞆躰を買う」などの慣用表現へ本章の分析を適用する可能性に触れる。

第 5 章は、論文全体のまとめと、残された課題について論じる。本論文では「被影響」の概念を中心に語レベルのヴォイス交替を分析対象として取り上げたが、さらに句レベルの現象へ適用する可能性を検討する。5.2 節では、間接受動（いわゆる「被害の受け身」）に触れる。また、(4a) や(5)には対応する受動文がないという特徴があるが (*貴重品が受け付けによって預かられた、*英語が健に教わられた)、LCS に AFFECTED 関数を含むものは語彙情報として既に受動的意味関係が指定されているため、さらなる受動化がないことがその理由であると考えられる。こういった受動化と受動的意味の関係を探ることも課題のひとつである。また、同じ「見つかる」を述語として取るものでも「健に仕事が見つかった」といった文では、「仕事」ではなく、二格の「健」が文法的主語として機能していると考えることができる。こういった場所格主語表現の分析も今後の課題である。5.3 節で論文全体をまとめ、5.4 節では今後の展望を 2 点挙げる。

- ・言語獲得理論との相関から本論が提案した意味構造の心理的な実在性を探る。
- ・他言語（特に類型論的に日本語とは隔たったものとされる言語）の分析への適用可能性を探ることで本論文の提案の有効性を実証する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語のヴォイス交替の現象を分析して、体系化するための意味構造理論を構築することをめざしたものである。これまでヴォイスの現象は統語的な現象として分析されることが多かったが、それを語彙主義的な立場から見直そうというものである。枠組みとしては制約に基づく文法理論である HPSG に基づき、近年語彙意味論において展開されている語彙概念構造 (LCS) の概念を導入して、意味関数による述語分解の手法を用いている。

先ず日本語の動詞を外項の有無、内項の数によりタイプに分けてその階層を提案している。そして、本論文の最もオリジナルな点であるが、LCS の意味関数として VOLITION、CAUSE とともに「被影響」AFFECTED を導入して、この AFFECTED という関数により動詞の自他交替や複合動詞の合成の現象を説明していく。また、その際、動詞の意味記述に複合的な事象構造と主事象という概念を導入する。

その上で、日本語の「押し出す、運び出す」といった移動の意味を持った語彙的複合動詞を分析対照とする。まず単独の「出す」「出る」の LCS を確定し、その過程でそこに単なる自他の区別ではなく、使役・再帰・受動といったヴォイス交替が絡んでいることを明らかにする。次に、詳しく複合動詞を分析して、いくつかの制約を提案している。最後に「教わる」といった着点主語を取り動詞、「見つかる」という被影響者を主語に取る動詞、さらには被害受身などの分析にも AFFECTED 関数を用いることで統一的な分析を与えることが出来ることが示される。

本論文は、その理論的立場と主張が明確であり、理論言語学における統語論偏重から語彙論重視へという流れの中で展開してきた枠組みを良く消化した上で、日本語の複合動詞などの現象の分析を通して、理論的な貢献をすることを目指している。興味深い言語事実をよく整理して詳しく分析しており、その実証的態度と手堅い理論的再編成には好感が持てる。もちろん、分析の中には一部問題点を指摘できる部分もあるし、提案の中心である AFFECTED という関数の性格およびその有効性をさらに確実なものにする必要がある。またさらに多くの言語現象による検証や、日本語以外の言語による検証によって、提案されている理論全体の有効性を高めて行く必要もある。しかし全体として、現象分析および理論の両面に於いて語彙意味論と日本語研究に対する貢献は明かであり、今後の発展を予想させる好論文である。

よって、本審査委員会は本論文を博士（言語文化）の学位を授与するのに十分ふさわしいものであると認定する。